

小林健三の神道論についての考察

——昭和三〇年代を中心に——

中道 豪 一

はじめに

本稿の目的は、昭和に活躍した神道研究者、小林健三の神道論を論じることである。なぜ小林を論じるかという点、それは時代で示された課題に対応した神道論を展開した人物だからである。

ただし本稿は、戦後の激動期において、伝統的な神道の表し方を堅持したのが正しいのか、それとも小林のように時代に対応した表し方を提起したのが正しいか、という価値判断を下すことを目的としない。小林の事例を考察する事で、昭和神道史を省みた時、参酌すべき素材を提供できればよいと考える。

そこで本稿は、小林が戦後の変革に対応した神道論を打ち出していった昭和二〇年以降、特に昭和三〇年代を中心とした神道論を明らかにする。その中で、小林の神道論に

強い影響を与えたと思われる西晋一郎（広島文理科大学）について指摘し、小野祖教らによる小林への疑義を吟味する事で伝統的神道との葛藤・軋轢についての考察を為し、時代に対応した神道論の経緯を明らかにしたい。

I 小林の経歴と本稿の論点について

まず小林健三とは何者か。『神道人物研究文献目録』（國學院大學日本文化研究所編 弘文堂 平成二二年）によると、小林の著書として『垂加神道の研究』と『復古神道』が挙げられており、垂加神道・復古神道の研究者として認知されていることが分かる。これは鎌田純一が平田篤胤研究について、「先述の如く、戦後小林健三氏がよく研究を進展せしめられ、その捉え方ですぐれた業績をみせられた」と述べていることからも、間違った認識ではあるまい。⁽¹⁾

その他にも『現代神道研究集成 第八巻 神道教学研究

編』（神社新報社 平成一二年）に抄録された『祭りの展開』（理想社 昭和三五年）などが現代の神道学に残された代表的足跡である。これらは極めて限定された範囲でしかないが、その著作群を見ても、小林を神道学者と認知するのは間違いない。

小林の経歴で特徴的なのは、國學院や皇學館という神道系大学で活躍したのではなく、東京帝国大学、広島文理科大学という現在の東京大学、広島大学に連なる機関へ職を奉じ活躍した点にある。⁽²⁾小林の赴任した広島文理国体学科の第一期生である井上順理（鳥取大学名誉教授、兵庫教育大学名誉教授）によれば、小林は東京帝大の平泉澄門下であり、平泉の推薦によって広島へ赴任したという。⁽³⁾神道を研究する意味において、神道学という範疇に入れるのは間違いないが、小林が平泉の旗下にあった人物である事は、小林の神道論を論じる上で押えねばならぬ点であろう。広島への赴任理由に深く関わると共に、小林の神道論に影響を及ぼしたであろう西との出会いの遠因となるからである。

この経緯については昭和十二年、広島文理に立ち上がった国体学教室構想を挙げねばならない。小林は東京帝国国体学を卒業後、同大学の講師を務めていたが、この国体学教室の助教として、白羽の矢を立てられたのである。小林は僭越であると、幾度も辞退したが、学長吉田賢龍の幾重

にもわたる説得で、広島行きを了解した。⁽⁴⁾井上によると、この人選に平泉が関わっていたというのだ。小林が「自分の人生行路を変えた決定的瞬間」と述べているように、平泉なくして西との出会いはなかったと思われる。

広島文理の国体学教室は、昭和一二年の日中戦争である『広島大学二十五年史 包括校史』（広島大学 昭和五二年）は語る。深まる戦況下、国体意識の明確化が求められる中、国体明徴運動の一環として、昭和一二年四月九日、東京・京都帝国大学、東京・広島文理科大学に、国体・日本精神に関する講座設置が命じられた。広島文理では、それに応じるに最適な人物、西晋一郎がいたことから、講座設置にとどまらず、研究室を開設、学科を立ち上げという経緯があり、これらは『広島文理科大学小史』（広島文理科大学 昭和二八年）など学園史に詳しい。

小林は助教として西の薫陶を受け、学生の指導にあたり、敗戦、退官を迎える。そして退官後の昭和二一年九月、中国新聞社に就職し、論説委員を務める傍ら、広島護国神社の崇敬会顧問などを務める。明治聖徳記念学会の再発足にも尽力していくが、それらと時期を同じくして展開される神道論に、西を中心とする国体学の影響が見て取れるというのが、本稿の力を入れて論じたい点である。

では、西の影響を概括してみよう。小林は昭和三七年、

玉川大学教授就任を機に広島を離れる。以後は『沢柳教育』（玉川大学出版部 昭和三八年）、『日本歴史の精神―社会科歴史批判―』（理想社 昭和四一年）、『日本教育寶典』（玉川大学出版部 昭和四二年）、『日本教育の思想的系譜』（理想社 昭和四三年）、など教育方面の研究を深めるが、折に触れて発表される論文・随筆にも西の影響が窺える。諸論文を集めた『祭りの展開』（理想社 昭和三五年）は、『現代神道の研究』（理想社 昭和三二年）と並んで、小林の問題意識が鮮明に表れたものだが、それ以上に西の影響が明白に見て取れるのは『教育力としての国学』（昭和四五年、錦正社）であろう。扉絵に「在りし日の西晋一郎先生」と題した写真と、西の「獨愼」という揮毫を掲載、さらに序言では『大阪毎日新聞』に掲載された西の国体学についてのコメントを全文再録している。また「月刊若木」（昭和四五年一月二四一号）に掲載された『祭りの展開』を回顧した一文なども、東京へ戻って以降も西への尊敬が薄れていないことを証明する証拠となろう。

玉川大学退職後は、国士館大學講師などを務め、平成元年に没している。晩年の著作に『平田神道の研究』（古神道仙法教本序 昭和五〇年）があり、それらの研究に示された問題意識から神道論を論じることも可能であろう。だが、本稿は昭和三〇年代を中心とする、時代に示された問題に

対応した神道論への着目と、それに影響を与えた西晋一郎・国体学の吟味を論点としたい。

II 小林の神道論について

——「四次元の神道」——

小林の代表的な神道論は「四次元の神道」である。⁽⁵⁾これは垂加・復古など既存の神道論（三次元）に対して、それらが派生する根源を想定し、その根源（四次元）に立ち戻ったうえで、その境地から現代に立ち返り、現代にあった神道論を打ち立てるといった内容が込められている。存在する世界を三次元、それを超えた根源を四次元と表現しているのである。小林の言をとってみよう。

私は「四次元の神道」を、従来の神道史を超える立場すなわち、記・紀を通してみた日本の神道でなく、それを生みだした根源にまでさかのぼって、われわれの神の姿に接しなければならぬ、と述べておいた。つまり既成の諸宗教を生みだす根源にさかのぼって、ここに立場をふまえるのでなければ、既成宗教を批判して、そのあり方を弁析することができぬ。あたかも原子物理学者が自然の作用の最奥にふみいり、その働らきの根源として原子力を発見したと同じように、われわれ

はそれを精神界において発見しなければならぬ、とするのである。

「太虚神道の説―小野祖教氏の示教に応う―」五五頁

ここから、神道が根源（四次元）から派生するという構成論と、その理解に基づく実践論の萌芽が窺えよう。

よつて小林にとつての神道とは、一定不変のものが絶対的に存在するのではなく、根源的存在が、時代や場所に応じた形で表現されたものと理解されていることがわかる。すると過去の神道説は、現代への適応を、必ずしも保証しないという結論に至る事が容易に理解できよう。それは小林が、現代に向き合おうとしない神道の姿を「糟粕神道」と言っていることが証明している。⁽⁶⁾ただ、ここで注意すべきは復古神道など、過去の神道論を批判しているのではなく、現代に対してそれらを無批判に適用する事を批判している点である。

であるならば、小林の説く「四次元の神道」から導かれる実践論とは如何なるものなのか。言うなれば立ち返る根源とは何であり、それを現代に表す具体的方法は何か。それは現代の諸現象から、それらに潜伏する神道要素「むすびの理論」を解き明かすことだといふ。⁽⁷⁾小林は根源への回帰による、神道の再表現を要求しているわけだが、その根

源が「むすびの思想」であり、実践とは「むすびの思想」を表現する事というわけである。その表現方法の例として、中江藤樹の聖胎純熱を挙げて説明している。⁽⁸⁾その論考手段は、小林本人が宗教哲学的であると述べているように、文献考証としては不十分である側面のあることは否めないが、この理解が「四次元の神道」の核となっていると言えよう。

その具体例として挙げるのが、武者小路実篤の『人間万歳』や「生命と神の如き自然」といった近代の文学作品から神道を見出すという試みである。⁽⁹⁾そうすると、四次元の神道は、神話などの新説・新解釈を打ち出すものではなく、事象に存在している神道を読み解くことで、そこに備わっている神道を自覚させるといった働きかけをしていることがわかる。「むすびの思想」を根源とする点を、新説と言えなくも無いが、小林の独創的な点は、神道論ではなく現代の事象から神道を読み解くといった手法であるう。

このような手法は、神社という事象の根源を「愛」と捉え、原爆の子の像を、神社の形に通じる「愛の殿堂」と指摘した言からも、一貫性を持っていると言える。⁽¹⁰⁾小林は広島文理退官後、中国新聞社に就職しており、こうした表現を新聞記者的であり、神道の伝統にそぐわないと指摘することもできよう。しかし、そうした考えの一方、時代に合わせた神道を説く小林の考えもまた存在し、迎えられてい

たのもまた事実である。

神社神道といっても、神饌一つとっても各地に諸形態が存在するように、一概に論じるわけにはいかない。よって小林の、根源を通しての様々な諸形態を想起し、実践を促すという一面は、むしろ神社神道の形成過程を髣髴させる面が強いと言えなくも無い。

例えば神宮においては、明治の「神宮御改正」において朝儀に照準を合わせた祭祀改廃が行われた。⁽¹⁾「国家の宗祀」たるべく典故確かな朝廷の儀式を基準にした改革であったが、小林の視座からこの問題を論じれば、そうした朝儀さえも生み出した根源に立ち返るべきであるということになる。これはまさに、神社という祭祀現場を持たない小林ゆえの言説に他ならないし、ここに宗教哲学的である点を確認することができる。

こうした小林の背景には、自身の被爆体験に端を発する核兵器開発への危機感、神道が日に日に衰退していく状況という危機的状況にあたって、神道を受容する伝統という支持基盤さえ失った日本人に対して、なんとかして伝えたいといった問題意識があった。そしてそうした日本人に対して、感情・日常生活に隠れた神道を示すことで、神道と共通点を結ばせたいという念願があったと言えよう。以下、こうした小林の「四次元の神道」と西との関係について論

じたい。

III 小林の神道論の根底にあるもの

——国体学——

学問も国家を離れて存在せず、学問することは国家に忠となる。こうした学究の態度が真の学問の目的であり、学問の日本的なところである。この日本的な学問こそ、生きた学問であって、これ以外の学問はすべて死んだ学問である。新興ドイツにはドイツ魂がある。このドイツ魂をもって歴史に立脚して学問をしているのだから、ドイツ的な発展があり、永遠の生命がある。

『大阪毎日新聞』昭和十五年八月二十日

この西の言を見る限り、小林の行動に一定の理解が得られるのではないか。生きた学問、すなわち現実につながらない学問を、学ではないとする思考を継承しているならば、「四次元の神道」は当然の帰結であろう。これと同様の言を小林自身も述べているので、このスタンスは戦前・戦中の一過性のものでなく、確たるものであったことが窺える。

しかし、小林の戦前・晩年における神道研究を知るものは、おそらくこうしたスタンスに基づく「四次元の神道」

といった神道論や、それを提起した諸論文を、奇異の目で眺めるであろう。史学・思想研究の中に、突然異質なものが出現した観があるからである。

それは神道学からも例外なく指摘される点であった。河野省三が「而も教育的、文化的水準を高くして神職の教化活動を推進しようとしているのである。私は広く神職社会の実状に接して、本書に親しく味読の力を注ぐ神職も、又本書の説く教化を身を以て実践する神道家も、少いのではないかと案ずる」と言い、小野祖教が「小林氏のように、特殊性をすてて、世界一律のものをつくる事とはちがうのだ」と言うのは、それを裏付ける。⁽¹²⁾

ここに小林が神道学者といわれながら、いわゆる神社神道とは違った角度で、神道を捉えていたことがわかる。これは本人も決して無自覚で主張したのではなく、「神社神道の正統派からはアウトサイダーと見られ、批判もあろうかと思う。従来ここまで言った説はなかったからである。その意味で大方の高批をお願いしておく」（『祭りの展開はしがき』）と言っているように本人も覚悟・自覚のうえであることが窺える。よって『祭りの展開』に関する河野と小野の言は、小林の予想が実現したものといえよう。

では、なぜ小林は河野が言うような危険を冒しても、小野のような批判があることを予測しながらも、四次元の神

道を主張したのか。小林の文献考証研究の代表的成果は、『垂加神道の研究』『平田神道の研究』であろう。鎌田純一らが評価するように、その研究は学術に外れていないばかりか、大きな道標になっている観すらある。であるならば、小野祖教のまこと神学、上田賢治の組織神学、安蘇谷正彦の神道の言葉化による神学のような、文献考証と密着度の高い主張は決して不可能では無かったと言えまいか。つまり自身の神道研究に基づく主張も可能であったのではあるまいか。仮にそうであったならば、なぜ宗教哲学的アプローチをしたのか。

こうしたアプローチは昭和二八年の「神道私見―現代神道への座標―」（第一巻第四号）、更に遡れば『復古神道』に所収されている昭和一七年の論文「神道の哲学」にも見えているが、本稿は、ここに西の影響を指摘したい。⁽¹³⁾

西については、拙稿「西晋一郎の神道教育―その基礎的考察―」（『國學院大學大学院紀要』第四〇輯 平成二二年）で論じたが、「孝の実行」の為、東西に渡る思想研究を為した人物である。その結果西田幾多郎に「西に西あり」と言わせ、人口に「西に西あり、東に西田あり」と膾炙されたと言われている。西の言を借りるならば、小林はこの「実行」というスタンスに影響を受けていると言え、「国体学」のスタンスと「教学・国民道德」という学のありかたが大

きな影響を与えていると思われる。

では小林に影響を与えたと思われる国体学科とは、如何なる学科であったのか。そして如何なる適性が認められたのかという問題を論じねばなるまい。この適性があつてこそ、広島文理において小林の神道論が醸成されたといえるからである。

まず国体学とは何なのか。『西晋一郎先生の生涯と哲学』（理想社 昭和二八年）や『西晋一郎の生涯と思想』（五曜書房 平成一五年）を記した西研究の第一人者、縄田二郎は国体学を、日本精神を根本原理にした哲学・倫理学・法制・経済・歴史の学を包容したものだ⁽¹⁴⁾という。これをいま少し詳述したのが、内海巖の挙げる、国体学の期待される探求法である。内海によると、国体学とは国体を明らかにするものであり、その為に思想・法律・史学・倫理などの諸学を階梯とすべきだ⁽¹⁵⁾という。西は次のように説明する。

この国体学は学科として独立したものではない。倫理学、哲学という学科と列記する学科ではない。しかし国体とはなんであるかを研究することは重要なことで、国体学もそうした意味で学問としての存在価値は十分ある。

国体の本源を究明するには、日本の憲法を調べて日

本の法制の精神を知り、日本の歴史を調べて日本の思想を把握する。こうした方面から国体学の研究は出発する。既成学問のように国体はかくあるものであるという定義はない。しかし定義とか特定のものがなければ学問でないように考えるのは、間違っている。そんな考え方がすでに古い思想である。この新しい国体学を研究するに、何を主眼とすべきかによつて国体学の任務と使命が自ら生れてくる。日本には日本独自の国体がある。その国体を研究する学問がなければならぬことは当然である（傍線筆者）

『大阪毎日新聞』昭和十五年八月二十日

縄田は国体学を「日本精神を根本原理として統合」すると表現したが、ここに現代学術にはない、教学・国民道德という学のあり方が窺える。いわゆる学術体系よりも「実行」を重視した学のありかたである。内海はこれを次のように表現する。

「既成の学ではなくて創造の学」
「理論のための探求ではなく、理の究明と義の実行の一体化の講学であるべきこと」
「神・儒・仏の東洋教学が広く各大学において軽視さ

れてきたことへの警告を含めて、東洋的風土に即した総合の学の形成を意図すべきこと」

『広島文理科大学創立五十周年』九三〜九四頁

これらは特長である反面「欧米哲学の移入・解説を主とする当時の哲学・倫理学の立場の学者からは異端視される動きがあった」と言われる特徴でもあった。⁽¹⁶⁾ということは採用の適性においても、一般的な研究室よりも、極めて特殊な適性が要求されることが容易に予想される。なぜならば思想・法律・史学・倫理の学問を修めていても、内海の挙げた国体学の理念、研究態度を行えなければ、すなわち「実行」が伴わねば適格者とは言えないからである。

小林が助教授として選ばれたことは、こうした国体学の適性者であったことを意味しよう。すると、国体学は西の構想を反映したものであるから、小林の西への思想的接近は、必然の経路であったとも言える。

神道という用語に絞って、その接近を考察してみよう。

縄田は「西晋一郎博士の神道哲学（一）」（『神道学』第一三三号 昭和六二年）で、西の学問自体が神道であったと評し、小林は「西神道について―その晩年定説の一考察―」（『学信』第一〇号 昭和三〇年）で、西晩年の学説を「西神道」と称した。西と神道の関係については、研究者によって多

少の温度差があるが、森田康之助も「西神道について―二宮尊徳との関係―」（『神道宗教』第二八号 昭和三七年）で西と神道の関連を認めるように、西の学と神道の親和性は定説化の傾向にあるといつてよからう。小林は西の学的態度を受容していたわけであるから、西の神道への接し方・表現法は、小林の行く手を暗示しているものと言えなくもない。なぜならば国体学の適格者として行く先を考えたと際、西は一つの到達点だからである。国体学の適格者として選定された時点で、西の思想継承は、宿命づけられていた向きがあると言えよう。

著作上に限って言えば、昭和三十年代以降、晩年に至るまで西への敬慕の念を窺える。しかしそれ以上に、この考えを裏付けるのが、西の思想との連続性である。西の思想を紐解くと、小林の研究軌跡に一定の理解が可能となるのである。

以上、昭和三十年代あたりの小林に見える、それまでの研究のスタイルから逸脱したともいえる姿勢の理由として、国体学の「実行」を重んじるあり方が影響している可能性を論じた。以下、西の神道論を考察することで、小林の神道論との連続性についての考察を深めたい。

IV 小林と西——小林の神道論における西の影響について——

大枠の問題として、広島文理国体学科の助教授に選ばれたことが、西との親和性を示していることを指摘した。では小林の神道論に、西はどのような形で表現されているのか。西の「天地開闢即国家建立」（『国民精神文化研究』第二年第三冊 昭和九年）を始めとする諸論文に示される神道論を指摘した後、「四次元の神道」の特徴と比較検討してみた。

まず形而下の影響として見えるのが、中江藤樹である。西は昭和七年藤樹頌徳会という、後の藤樹学会に繋がる組織と関わるようになった。藤樹が西の尊敬する人物の一人であったことは、森田が「藤樹の学問が『孝』に出発し『孝』に終始せることに共鳴された」と言い、縄田・小林も認めるところである。⁽¹⁷⁾小林が藤樹の聖胎純熟という概念をもつて、四次元の神道を説明してことは先述したが、その思考法の淵源を西の藤樹への関心にとつても、間違いではなからう。後に小林は「全人論序説―藤樹学における全人思想の発展―」（『玉川大学文学部紀要』第三号 昭和三七年）を著しており、「四次元の神道」以降も、関心を抱き続けたことが分かる。なお藤樹の思想・神観念を用いた「四次

元の神道」については、森田が「中江藤樹の学問と思想―神道との関連―」（『神道学』第四一号 昭和三九年）において、藤樹の思想分析について、疑義を發している。

次に形而上の問題として挙げられるのが、根源的存在に迫るといふ作業と、そこから現代に回帰するという手法である。西によると、天地開闢とは、時間的にこれ以上遡れないといふ時間的限界を象徴的に表現したものだといふ。西の言を見てみよう。

すると残される唯一の解釈は天地開闢物語は本来其の始無きもの、即ち時間の沙汰無いものを何とかしして表象せんとするとき、其れの以前の無い最初の形、即ち天地開闢とするのである。天地開闢とは絶対的初発といふことを時間的に表象する已むを得ざる形相である。

「天地開闢即国家建立」『人間即家国の説』
（明世堂書店 昭和一九年）一七頁

つまり記紀をはじめとする天地開闢神話に見える記述は、事実をそのまま表現したのではなく、絶対的初発を象徴的に表したものだといふのだ。よって、天地開闢の神話は、その記述そのままを受容するのではなく、そこに込められ

た意味を理解することが必要とされるのである。「天地初発ということ自体の意味からして会得出来なくてはならぬ」(『神代史』『人間即家国の説』一頁)という記述が、それを裏付けよう。ここに、西の根源的存在に迫る思索を垣間見ることができるのである。

次に現代に回帰するという点であるが、それは西の天地開闢が今日でも起こりうるという主張に見ることができ、天地開闢自体、それ以上溯り得ない時間的限界であるから、一見矛盾しているように感じられる。しかし、これは西の「歴史とは反省である」という言葉を見れば理解可能となる。西によると、歴史は「自己」と「生活」の間で、反省と創成が循環して成立するものという理解が為されている。人は過去の出来事、歴史的素材から、気づき・反省を得る。そしてそこから新たな気づきを得て、生活を創成していくという。つまり人は、反省することによって歴史を築いていく存在だといふのだ。⁽¹⁸⁾

となると、その反省素材のうち、もつとも古いものは何かと考えた時、最古のものが時間的限界である天地開闢であるというわけである。よって天地開闢は今日でも起こり得ることになる。西が北畠親房の「天地の初は今日が成す」を引用しているのも、こうした意図によるものではないかと考える。

であるならば次に素材としての天地開闢が如何なる意味を持つか知らねばならない。つまり、天地開闢から何を反省するかという具体的問題である。ここについて西は詳しく述べていないが、西の思想傾向と前後の記述から推測するしかないが、それは天地開闢が人知の限界であると考えられる。となると天地開闢以前というのは、人の知りえぬ永遠の世界が保証されるとの論が展開される。次の記述からも、この理解は適当と思われる。

天地開闢を時間裡のものと思えば、言うまでもなく其れ以前がなければならぬ、即ち天地開闢は未だ以て真の初発とするに足らぬ。天地開闢が時間界の出現であるから、其の裏に必然永遠が存せねばならぬ。

「天地開闢即国家建立」『人間即家国の説』二五頁

つまり時間的限界を設けることで、対立概念たる限界を越えた世界というものを提示しているのである。そうなるのと、天地開闢とは、時間的限界であり、現代における最古の反省材料であり、永遠という人知を超えた存在を保証するものと解釈でき、西の主張に一貫性と整合性が出てくる。よって神道にみる万物同根の思想も、天地開闢以前の「兆」に端を発するという考えが成立していくわけである。⁽¹⁹⁾

ここに「時間的境界」「最古の反省材料」「永遠の提示」という要素が絡み合って作用していく様相が展開されており、西の学問が循環的といわれる所以が表されている。

ではこれがどう小林の「四次元の神道」と関連するのか。それは「根源」(四次元)に立ち返り、現代に立ち返るといふ点である。西は天地初発、天地開闢を持つて根源となし、その理解から時間的境界、最古の反省材料、万物一体観という理解を派生させた。小林の場合は、「むすびの思想」という根源に立ち返り、藤樹の聖胎純熟といった観念を媒介にすることで、時代・場所といった状況に応じて表現する理解を派生させている。ここに、根源に立ち返ることで、現代における実践に寄与するスタイルの共通点が指摘できる。

ただ西は、時代的制約もあつてのことか、日本を強調した展開を見せているのに対し、小林はそれを、日本・神道に限らず諸宗教にまで広めた点に差異を指摘することができよう。その意味において、小林の神道論は西の神道論の進化形とも言える。ではもし仮に進化形と言う表現が正しければ、なぜ進化する必要があつたのか。なぜ、西の敷衍に終わらなかつたのか。以下その理由を論じてみたい。

V 小林の神道論の実践的側面とその反応

田中忠雄は「神道における近代との対決」(『国民評論』昭和三六年一月号)で、小林の近代との対決姿勢を高く評価した。田中は「むすび」の神話から「分身」の大原理を導き出したのは、恐らく本書における一ばんの大きな成果である」と評価する。田中によると、小林はカフカの「変身」に示された人間性の断絶という近代的問題に対して、自己と他者を含む天地万物が、一つの大生命からの「分身」であるという原理を示したという。そして、武者小路実篤ら白樺派の思想に「むすび」を見て、そこから「分身」の原理を導き出したというのである。

ここで田中の主張の是非を確かめる為にも、四次元の神道の根本である「むすびの思想」を確認しておこう。まず小林の言う「むすびの思想」とは何か。

根源的な「生命の尊重」とその営みに対する積極的な参加である。「むすび」の思想がこれであるが、日本の古典神話のあらゆるところに見えている思想である。私はこれを「生みの神話」的発想法と呼びたい。ここには唯一の権威ある絶対神が天地を創造し、人間を作りだしたという思想は見られない。(中略)

このように天地人同根であり、それは一つの生命体の「分身」と見られるから、そこにいわば血縁的ともいべき親近感がある。

「カフカの『変身』と神道の人間観―『白樺派』の運動から見た―」（『祭りの展開』六三頁）

これによると、根源たる一つの生命体との連続性、つまり人間であれば根源の「分身」であるとの自覚を持つことが「むすびの思想」にあたるといえる。小林はこれを「かかる日本の神道観を最も近代的な表現をかりて示している『白樺派』の思想について述べたい」と論を展開する。⁽²⁰⁾

神道思想が人間の存在を、宇宙の精神（神）の分身・みろの対して、これと対蹠的な思想がある。「変身」の概念がそれである。実存主義の文学は人間社会から疎外され、孤立した一個の市民的自己を「変身」という限界状況において捉え、逆に人間存在のあり方を適確に照射している。それは人間の否定であり、語をかつて云えば、人間が人間であることをやめた瞬間の限界状況、われわれの概念でいえば人非人すなわち虫けらである。これは人間であつて、しかも人間たる価値（人格）を喪失した、状況である。

「カフカの『変身』と神道の人間観―『白樺派』の運動から見た―」（『祭りの展開』七五頁）

この「分身」の対称的存在が「変身」であり、それがフランツ・カフカの『変身』から読み取れるというのである。「変身」とは、主人公グレゴール・ザムザが、自己の良心に忠実であり、それを主張したばかりに、社会から見捨てられ、毒虫に変身してしまったという物語である。小林は、この毒虫を人間の否定・人間が人間であることをやめた瞬間の限界状況であり「人間社会と絶縁した孤立状況」「絶望の象徴」と捉え、⁽²¹⁾その対立概念として武者小路実篤の狂言『人間万歳』や「生命と神の如き自然」という詩から神道を、いや「むすびの思想」を指摘したのである。

では小林はなぜ、現代と対決をせねばならなかったのか。神道説を展開するのではなく、現代的素材から、神道要素「むすびの思想」を表さなければならなかったのか。

それは、国体の変革が大きな要因であろう。小林は祭政一致の伝統変容を大問題として捉えている。日本の国体は祭政一致の伝統によって保持されてきたが、戦後の象徴天皇は、今までの神道のありかたを根底からゆさぶる問題であるという。よって「伝統の祭政一致論をこれからの神社神道の教学原理とすることはできない」という主張になり、

現代的素材を踏まえる必要が出てくるのである。⁽²²⁾

であるから、小林は従来と異なった方法で国体を継承させる方途を探る。小林の手法はそうした意識に端を発している。その意味では、国体の核ともいえる神道を支える国民観念を涵養する手段を講じようとしたともいえるのである。

しかし、この手法は神社界からの反応を引き起こした。きっかけは小林が、「神道教化の新しい道」(「祭りの展開」)で小野の祭政一致に関する考察に批判を加えることである。それに対し、小野が『神社新報』(昭和三七年四月七日、一四日)紙上で「第四次元的神道批判—小林健三氏の批判に—」と題し反論を掲載したのである。小林は「神社神道はこの国の教の一部分であり、羽翼をなすものである」というように神社神道を含めた国体のありかた自体を問題とする傾向があるから、祭祀現場という神社の中核に触れる事の多い小野からすると、小林の主張はなんとも夢想的であり、非現実的であると映った。それは小野の「私から見ると、小林氏の神道論は新宗教の創唱である」という言説から窺い知ることができよう。

これは国体と神社が制度上切断されたことによる悲劇と言えよう。国体という土台の上に人・神社があると仮定して構造を説明するならば、日本国憲法は、国体と人・神社

の間に築かれた壁ということになる。ここにおいて、断絶された国体と人をつなぐことを重視する立場が小林であれば、小野は神社と人をつなぐことを重視する立場である。さらに言うならば小野は、新しく築かれた日本国憲法意という壁と、それを利用して神社を攻撃する者から、神道を防衛しなければならぬ立場である。立場が違うのである。ここに国体の伝統を保持するために、何としても、伝統に無い方法を用いても、つまり日本国憲法という壁を用いても新たな世代に伝えていかねばならない小林と、有史になり国体変容の荒波に晒される神社を維持せねばならぬ、日本国憲法という壁からの攻撃を防がねばならぬ小野との溝は明らかである。

小林は小野の反論に対して「太虚神道の説」で再反論をしたが、ここには小野への詳細な反論と、なぜそうしたりスクを犯してまでも、発言する必要があるかが吐露されている。人類を滅亡に追い込む兵器開発への危機感、そうした危機感に端を発する諸問題に答えられない現代宗教に対する危機感、そうした中、果敢に挑戦する宗教者たちへの関心が現れている。象徴的な事件として、昭和二九年に行われた水爆実験は、被爆体験のある小林にとって、問題意識を刺激する事件であった。次の言を見ても、その因果関係が理解できよう。

第四次元の神道は神社神道や教派神道といった族制的特殊教だけにとどまるものではない。個人の救いと安心につながるのみならず、全人類をもその対象として、原水爆の時代を転換させる人類の要素をもたなくてはならぬ。私は神道を日本の特殊教というだけに限定したくない。それは日本を根底から起すとともに、アジアの解放とそして全人類の救いに向って、すなわち世界共同体の宗教にまで拡大強化されなければならないと思うのである。

「四次元の神道―組織神学への試み―」『祭りの展開』八八頁

小林が、既存の神道説の敷衍でなく、それを生み出した根源にまで遡る手法をとったのは、西の天地開闢理解に促される理論的側面だけでなく、こうした現実具体の生活体験によるところが多いことを指摘しておきたい。

またそうした小林の意識が表れた活動として、広島護国神社、出雲大社、神道講演との関係についても触れておきたい。広島護国神社の社報『護国神道』（広島護国神社所蔵）に昭和三六年の第一号から小林の連載がなされており、第一号の「英霊に応える道」には、「護国の神の道の実践す

なわち『祭りの展開』となる道理である」などの記載が見える。また詳細は不明だが、広島護国神社の宮司であった横井時常と小林を中心とした広島神道教化研究所が組織されていた。これに神道講演の立役者の一人である石井寿夫、照沼好文と共に開催したシンポジウムの記録が『祭りの展開』に収められている。

次に出雲大社との関わりだが、そもそも「四次元の神道」を論じた『祭りの展開』という書名は、千家尊宣の「祭りの展開としての教化」に由来することを千家自身が『祭りの展開』の序文で語っている。小林と千家の交流の端緒は分からないが、小林が広島中国新聞を退社した際、昭和三年の一月から毎月五日間ほど大社国学館への来講が行われた事を始め、生涯にわたる交流があったようである。²⁴⁾

最後に神道講演との交流について触れておきたい。小林自身が神道講演に積極的に関与した跡は、現時点で確認できないが、その代表的担い手の一人である石井寿夫との交流は確かである。神道講演とは、佐古幸嬰・石井寿夫によつて展開された、社頭講話を中心とする活動であり、現在も神道講演全国協議会として、その活動を継承している。石井は非常に情熱的な学者・実践者であったようで、千家は石井を「昭和の平田篤胤²⁵⁾」と称え、神道講演全国協議会

の現会長である村田和之も、同様の証言をしている。⁽²⁶⁾

この他にも藤樹学会、石門心学会などにおける活動も見逃せないが、それは稿を改めたい。

おわりに

以上、小林の四次元の神道に示される神道論を、西・国体学との関係において論じ、小林の神道論を論じた。その意味において、当初の目的は果たせたかと思う。

未だ立証が不十分な点もあるとはいえ、小林と西における連続性を論じ、小林の神道論には、西の学問の出発点である「実行」という要素が継承されていること、それに基づく文献考証に止まらない宗教哲学的理解があることを指摘できた点が、本稿の成果と思われる。

そうした意味で、小林は神道学者であると共に、国体学者であったと言える。小林は昭和二十一年二月二日、同僚正木慶秀と共に辞表を提出、三月末に依願免官の辞令が出た。国体学科はこうして昭和二十一年三月末日、その幕を閉じた。⁽²⁷⁾しかし国体学科消滅にも関わらず、小林は国体学の表現を止めなかった。昭和十九年に没した西の学を継承する道を歩んだとも言えよう。よって昭和三〇年代に展開された時事的課題に対応した小林の神道論は、そうした生き方によって形成された可能性が高いと結論づけたい。

註

(1)

『神道大系 論説編』二六 復古神道(四) 平田篤胤(神道大系編纂会 昭和六一年) 解題の一七頁
略歴ならびに主な著作リストを以下に掲げる

(2)

明治三六年十月二七日、長野県生。昭和三年東京帝国大学文学部国史学科を卒業後、内務省神社局嘱託となると共に國學院大學講師を勤める。昭和七年第四高等学校教授に就任。昭和十年から東京帝国大学にて神道学講座の講師を経た後、昭和十四年広島文理科大学教授に任官したが戦後の国体学教室消滅に伴い退官。その後昭和二十一年九月十六日から昭和三十七年三月一日まで広島地方新聞社である中国新聞社にて論説委員を務める。昭和三十六年四月からは広島護国神社崇敬会顧問も務める。昭和三十七年四月玉川大学教授、その後国士館大学講師を経て平成元年十月二日、急性心不全の爲三鷹市厚生会病院にて逝去。享年八五歳。

単著		
『日本神道史の研究』	(至文堂)	昭和九年)
『建武中興と金崎』	(金崎宮御祭神六百年大祭奉賛会)	昭和一二年)
『垂加神道の研究』	(至文堂)	昭和一五年)
『護良親王御事蹟』	(官幣中社鎌倉宮社務所)	昭和一五年)
『神代紀の意義と現代生活』	(至文堂)	昭和一六年)
『垂加神道』	(理想社)	昭和一七年)
『国体思想史論』	(国民評論社)	昭和一七年)
『英彦山神社小史』	(英彦山神社社務所)	昭和一七年)
『復古神道』	(理想社)	昭和二〇年)
『現代神道の研究』	(理想社)	昭和三一年)
『祭りの展開—神道教化の新しい道—』	(理想社)	昭和三五年)
『沢柳教育—その生涯と思想—』	(玉川大学出版部)	昭和三八年)
『日本教育の思想的系譜』	(理想社)	昭和四三年)
『教育力としての国学』	(錦正社)	昭和四五年)
『平田神道の研究』	(古神道仙法教本庁)	昭和五〇年)
共著		
『日本歴史の精神—社会科歴史批判—』	(理想社)	昭和四一年)
『招魂社成立史の研究』	(錦正社)	昭和四四年)
『水戸史学の伝統』	(水戸史学会)	昭和五八年)
校正・校注		
『神皇正統記』	(白山比咩神社)	昭和九年)
『日本教育寶典 藤田東湖・山崎闇斎集』	(玉川大学出版部)	昭和四二年)

(3)

井上順理「創設当時の思い出」『広島文理科大学創立五十周年記念事業会 昭和五五年』一三六―一三八頁に記述がある。また平成二一年六月、ご本人と会い確認させて頂いた。

(4)

小林健三「国体学教室創設のころ」『同前』二三五―二三六頁

(5)

この「四次元の神道」だが、これは「カフカの『変身』と神道の人間観」「四次元の神道—組織神学への試み—」「歴史意識と神道」という論文群で提起されたものである。これらは別々に発表された論文だが、神道の原理を追究・拡張する共通目的があったという。これら三論文は『祭りの展開』に第二として収録されている。

(6)

小林健三「太虚神道の説—小野祖教氏の示教に応う—」『神道宗教』第二八号 昭和三七年) 五三頁

(7)

これは小林の以下の発言からも了解できよう。「現代神道の立場から、わが古神道の具有する、むすび」の思想をその極限まで展開すると、どのようなことになるか、ということを考えてみたものである」(『太虚神道の説—小野祖教氏の示教に応う—』五三頁)

(8)

小林は「祭りの展開」(八八頁)で次のように述べる。「上から降りてきた道、そして下から昇っていわゆる『聖胎純熟』の時にいたれば、脱胎神化して聖神の位にいたる。天地とその徳をあわせ、日月とその明をあわせ、四時とその序をあわせ、鬼神とその吉凶を合わせ、四表に光被し、上下にいたるといのはこの位をさすのである。これがいわゆる自由の境地である。ヒューマニズムのいう自由とは違う趣を見るのである」これだけだと難解な

ため「全人論序説」(『論叢』第三号 昭和三十七年)で「聖胎純熟」を説いている箇所を挙げて理解を試みたい。それは以下のようなものである。

「修養の発達段階に依りて、本心の良知が開発されてゆく。これを藤樹は『聖胎』が『純熟』するという表現をつかっている。聖胎とは聖人のきざしであり、聖人となり得る可能性をいっただものであるが、そのきざしを十分に開発して純粋に熟化したときが『聖人』の位であり、純粋半ばなのを『亜聖』といっている」

つまり藤樹の神観を通して、時処位に応じた根本理念の発露を論じたものと思われる。

(9) 「カフカの『変身』と神道の間観」(『祭りの展開』)

(10) 「現代神道の座標―停滞を超えて―」(『祭りの展開』) 一七二、一八〇頁

(11) 中西正幸「七 明治の新祭式」(『神宮祭祀の研究』国書刊行会 平成一九年)

(12) 河野の出版は「小林健三氏の『祭りの展開』を読む」(『神道学』出雲復刊 第二八号 昭和三六年)であり、

小野の出版は(第四次元的神道批判(一))―小林健三氏の批判に―『神社新報』昭和三十七年四月七日)である。

(13) この考察は、小林自身が「神道私見」に述べている以下の記述に依拠している。「神道」というものを、歴史的に研究するということも、その一斑の仕事であるが、それだけではもとより不十分で、やはり宗教哲学の基礎の上に立って、綿密な研究をやらねばならぬ。神道史といえは神祇史と同一視された過去の事実、ことの真相をみてはいない。また戦後の風潮の中で、神道史は天皇史で

あるかのごとき誤解があったように思う。これらはいずれも神道の論の立て方を知らぬから出た新説で、短見のそしりを免れぬ」一三頁

(14) 「哲学・倫理学のほか法制・経済・歴史の学を包容し、

しかもこれらを日本精神を根本原理として統合しようとするもの縄田」(『国体学教室』(『広島文理科大学創立五十周年』二四〇―二四一頁)

(15) 「東洋哲学史(支那哲学史・仏教哲学史・日本思想史)や哲学(西洋哲学・西洋哲学史)社会学などを咀嚼した

上に、国体思想史(山鹿素行の学・水戸学・崎門学・国学の四大学統の総合的研究を含む)。国民道徳論を探索していく方法、憲法学・法理学・日本法政史をはじめとして、民法・行政法・経済学などの総合的視点から探求していく方法、国史学を中心とする歴史的探求の方法、倫理学(支那倫理学・西洋倫理学・日本倫理思想史・倫理学史)を中心とする探求法などが期待されると考えられる」(『広島文理科大学創立五十周年』九四頁)

(16) 『広島文理科大学創立五十周年』九三頁

(17) 森田康之助「西神道について―二宮尊徳との関係―」(『神道宗教』第二八号 昭和三十七年)一二二頁

(18) 既に国民が自身を物語れるものである以上、反省の記録である以上、反省せられ物語られる国民生活の何物かがなければならぬ。生活事実の上に生活の反省が起り、此の反省は即ち自己を確めること即ち自信であり、即ち国民的信仰である。此の信仰自信はやがて又生活事実を創成する実力である。創成せられた生活事実又反省せられて更に自信を日々新たならしめる。事實は信仰を、信

- 仰は事実を予想しつつ、相生じつつ進むことが歴史の真面目である。(西晋一郎「天地開闢即国家建立」『人間即家国の説』二四頁)
- (19) 即ち神あり、物あり、物界未だ宛然出現せざるに神界既に其の兆を蔵すとなしてをる。而して我が神代伝説を一貫する太古人の人生觀世界觀の真髓は神物一体觀に外ならぬ。(「天地開闢即国家建立」『人間即家国の説』二五頁)
- (20) 「カフカの『変身』と神道の人間觀―『白樺派』の運動から見た―」(『祭りの展開』六五頁)
- (21) 同前 七八頁
- (22) 「神道教化の新しい道」『祭りの展開』一七頁
- (23) 「太虚神道の説―小野祖教氏の示教に応う―」六〇頁
- (24) 千家尊宣『神道出雲百話 皇室をめぐる日本の心』(日本教文社 昭和四三年) 一五二頁
- (25) 同前 二〇〇頁
- (26) 平成二年五月、長束神社(広島県広島市安佐南区)宮司である村田和之より、直接お話を伺った。
- (27) 小林「西神道について―その晩年定説の一考察―」(『学信』第一〇号 昭和三〇年) 一八二―一八三頁

※ 文献引用に際して、旧かな遣い・旧字体は可能な限り改めた。
(國學院大學大学院博士課程後期)